様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｈ０３４４４

研究課題名（和文）高齢期の生活実態と求められる在宅ケアの質に関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文）A theoretical and empirical study on the living conditions of older people and the quality of home care.

研究代表者
白瀬　由美香（SHIRASE, Yumika）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：５０４５４４９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、インタビュー調査や質問紙調査を通じて在宅高齢者の生活実態を多角的に捉えることを試みた。生活習慣や日常生活で重視するもの、地域の支え合いの状況について、高齢者の属性や社会参加の状況による違いが見受けられた。また、本研究では高齢者の生活実態に即した生活モデルにもとづく在宅ケアにおいて、専門職はどのように支援を行なうか、それはどのようなケアであるのかについて検討を行なった。既存の在宅ケアの評価手法は医学モデルによるものが多数を占めるが、パーソン・センタード・ケアやセルフケアの概念は生活モデルとの調和の可能性がある。在宅ケアの領域でさらなる実践と検証が求められている。

研究成果の概要（英文）：This study analysed the living conditions of older Japanese people from various regions using qualitative and quantitative surveys. There were several differences in lifestyle such as daily habits, important values, and mutual support among older people, which depended on their core attributes and degrees of social participation. The study also explored the desired quality of their home care based on the relationship between the life model approach and their living conditions. A literature review and interviews were conducted focusing on how professionals behave and what kind of care should be delivered under the life model. Although most of the existing evaluation and assessment methods for home care are dominated by the medical model, by emphasizing safety and hygiene from the perspective of healthcare professionals, the concept of person-centred care and self-care offered hope towards progress. More investigations and research in home care settings are expected for future studies.

研究分野：社会政策、社会福祉学

キーワード：高齢者　生活モデル　在宅ケア　ケアの質

１．研究開始当初の背景

現代の高齢者のライフスタイルは非常に多様化しており、それに伴い高齢者のイメージも従来のような庇護されるべき存在から変化しつつある。活発に社会参加することで高齢者は自らの健康維持を図るのみならず、地域社会における支え合いを担う人的資源として捉えられるようにすらなっている。しかし、2013 年の日本人の平均余命が男性 80.21 歳、女性 86.61 歳であるのに対して、健康寿命はそれぞれ 71.19 歳、74.21 歳であるように、平均すると誰もがいずれは 10 年前後の間、介護が必要となる可能性がある。

他方、近年の医療・介護政策においては、在宅でより長く生活し続けることを念頭に、社会資源や住環境の整備を行う「地域包括ケア」が推進されている。在宅ケアに関しては、「医学モデル」から「生活モデル」への転換とも言われるように、病院や施設でのケアをそのまま自宅に持ち込んでも在宅ケアと呼べる訳ではない。高齢者の従前のライフスタイルをできる限り維持することにも配慮が必要となり、そうした観点から質の高いケアを追求する必要性が高まっている。

研究代表者はこれまでの研究において、一般高齢者向けの介護予防事業として実施される高齢者サロンに関する調査を実施してきた。その結果、高齢者サロン参加者のほうが非参加者よりも主観的健康状態や栄養状態が良く、外出頻度も高いことなど、現代の高齢者のライフスタイルや社会関係と健康との関連性がわかってきた。けれども、それらの因果関係を明らかにするためには、引き続き回答者の生活、健康状態の変化を追跡する調査を行なうことが必要であるといえた。

また、ケアは一般的なサービスとは違い、専門的な見地に基づく適切さを備えた上で満足度が追求される必要があるとされている。また、高齢者本人と家族介護者とでは、受けたサービスに対する評価が異なるとの研究もある。したがって、利用者の満足度が高く、質が高い在宅ケアとは、どのようなものであるのかについて、多様な立場に立脚して検討することが研究課題として残されている。

２．研究の目的

本研究の目的は、在宅高齢者の生活実態を踏まえて、それに即した在宅ケアの在り方や質を検証することである。本研究を通じて、在宅ケアのプロセスで高齢者や家族は何を重要としているか、専門職はどのように支援すべきなのかを問い直す。これらの研究により、生活モデルに即した、持続可能性の高い利用者中心のケアを政策的に推進していくための基礎となる理論的・実証的な知見を得ることを目指す。

３．研究の方法

本研究は、（１）高齢期の生活実態を捉える調査研究、（２）在宅ケアの質に関する調査研究を軸に研究を進めた。

（１）では、高齢者の生活と社会参加に関するインタビューと質問紙調査の実施、介護ニーズ調査や既存の個票データの二次分析などを行ない、現代日本における高齢期の生活実態を捉える。

（２）では、ケアの質の指標化に関する文献調査や、高齢者本人・家族・専門職への聞き取りなどを通じて、在宅ケアの質をめぐる議論の現況を整理する。

研究を進める際には、質的研究と量的研究の両方を組み合わせる混合研究法（mixed methods）を採用した。多様な手法による調査から得られた分析結果を相互に検討することを繰り返しつつ検証を進めた。

４．研究成果

（１）高齢期の生活実態

まず、いくつかの地域で高齢者向けのサロン活動や介護予防事業など参与観察を行ない、高齢期の日常生活全般に関する情報収集を行なった。

その後、協力が得られた自治体において、平成 28 年 8 月から 9 月にかけて、高齢者に対するインタビュー調査を実施した。日常生活や医療・介護サービス利用に関する意識、在宅で暮らし続けることに対する当事者の思いを聞き取った。

それらから得られた知見を踏まえて、平成 28 年から平成 30 年にかけて同自治体で毎年 2 月に「高齢者の生活と健康に関する調査」として郵送自記式の質問紙調査を行なった。対象者は、介護予防事業の一環として実施されている高齢者ふれあいサロン参加者、同サロンを運営するボランティア活動従事者、市内在住の一般高齢者であった。

その結果、これら 3 者に関して、生活様式や社会参加の状況、健康状態、活動能力などの面で違いのあることがわかった。とりわけ日常生活で重視する事柄については、いずれも健康を最重視している点は共通したものの、2 位以下では異なる傾向を見せていた。ボランティアは近隣との友好関係、サロン参加者は他者とのコミュニケーション、一般高齢者は運動を重視していた。

また、一般高齢者とボランティアに従事する高齢者の活動能力指標（老研式活動能力指標、JST 版活動能力指標）を比較すると、ボランティアはすべての項目にわたり全般的に高く、特に社会関係に関する能力の高さが顕著であることが示された。

他方、看病や介護、悩み事の相談で頼れる人のいる者の割合が、ふれあいサロン参加者は 5 割程度にとどまり、ボランティアや一般高齢者よりも低いことが明らかになった。ボランティアの高齢化や担い手不足が懸念さ

れるものの、サロン活動のような集いの場を設けること、それを継続することは、孤立リスクの高い高齢者にとって、社会とのつながりを確保する意義があると考えられた。

ただし上記の結果については、地域特性を踏まえて結論づける必要があることから、いくつかの地域で実施された介護ニーズ調査や内閣府などが実施した高齢者の意識調査とも比較検討を行った。その成果については、引き続き分析を行い、論文の投稿に向けた準備を進めている。

（２）在宅ケアの質

在宅ケアの質が既存の研究においてどのように捉えられているのかについて、主として文献調査を行なった。概して医療、看護、介護などの分野では、施設での実践を援用し、専門職から見た安全・衛生状態の管理という面で在宅での質の確保が論じられているものが多かった。また近年は医療分野を中心として、生存率や再入院率などのアウトカム評価が重視されていたのに対して、介護分野ではプロセス評価が主流であった。在宅での生活支援のあり方については、当事者や家族の視点と専門職のそれとは必ずしも一致しないことから、両者をいかにすり合わせていくのかが課題として浮き彫りになった。

そうした作業を通じて、注目したのが英国の認知症ケア分野で取り入れられている「パーソンセンタードケア」概念およびケア実践である。概念の提唱者キッドウッドによれば、認知症者が一人の人間として尊重されることが中心にあり、共にあること、くつろぎ、自分らしさ、結びつき、たずさわりなどが重要な心理的支援となるという。その実践手法である認知症ケアマッピングは、ケアの質を一時的に評価するだけでなく、職員に振り返りの機会を提供して改善を繰り返していくためのツールとして用いられていた。ただし、理念としては優れているものの、在宅でのケア実践でどこまで適用可能なのかについてはさらなる実践の蓄積と検証の必要性が残されていた。

これら文献調査から得られた知見については、どちらかというと多くが医学モデル的なケアの質の評価を指向しており、生活モデルにもとづく支援の観点が十分に盛り込まれていないように見受けられた。そこで本研究では、以下の 2 つの調査を進めた。

第１に、生活モデルにもとづくケアの実践例として、富山県で行なわれている「共生型ケア」と呼ばれる高齢者・障害（児）者・子どもなど多様な利用者を同一施設で処遇する取り組みについても調査を進めた。共生型ケアは、対象者別の施設とは異なる多世代交流の利点がある一方で、個別ニーズにどこまで対応が可能であるのかについては課題もあることがわかった。共生型については、平成 30 年度からの科学研究費助成事業を通じて、引き続き検証を行なう予定である。

第 2 に、在宅ケアに関わる専門職が高齢者ケアに果たしてきた役割の変遷に注目し、関連する史資料収集と聞き取りを行った。特に本人や家族によるセルフケアとそれに対する専門職の支援のあり方に注目した。支援現場の人々との対話を通じた研究の深化と成果の社会還元を企図した公開セミナーを開催し、保健師、看護教員、医師、患者支援団体など多様な立場の人々の参画を得て、歴史的視座から現代日本が直面する在宅ケアの課題およびそこで求められるケアの質について議論を行った。その結果、生活モデルを指向しようとしつつも、専門職と利用者や家族との関係性の構築が、とりわけ都市部では難しい実態が改めて確認された。

そのほかにも、一般向けのセミナーでの専門職の役割に関する報告や雑誌による座談会企画への参加など、疾病の治療という医学モデルによる解決策にとどまらない、生活モデルにもとづく支援のあり方に関する知見の発信に努めた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

①赤木佳寿子「地域包括ケアシステムにおける薬剤師の役割：薬剤師の再定義」『保健医療社会学論集』29(1)（印刷中）2018 年．査読無（依頼論文）

②猪飼周平「地域包括ケア政策の総括から共生社会へ」『月刊保険診療』72(6):34-39, 2017 年．査読無（依頼論文）

③赤木佳寿子「薬局・薬剤師の地域展開の意味 ： 健康概念の転換と薬剤師の職能の変化から」『公衆衛生』81(11):872-879, 2017 年．査読無（依頼論文）

④白瀬由美香・泉田信行「高齢者ふれあいサロンへの参加と外出行動：サロン参加者・非参加者の比較」『厚生の指標』63(15):14-19, 2016 年．査読無（依頼論文）

〔学会発表〕（計１３件）

①赤木佳寿子「薬剤師の歴史の再認識:ファマシューティカルケアに示された薬剤師の将来像」患者中心の医療を学ぶ会，2018 年．

②白瀬由美香・泉田信行「ふれあいサロンでボランティア活動に従事する高齢者の高次生活機能の状態：老研式および JST 版活動能力指標にもとづく一般高齢者との比較」第 59 回日本老年社会科学会大会，2017 年．

③泉田信行・白瀬由美香「高齢者の外出頻度の分析における季節性の影響の検討：網走市高齢者の生活と健康に関する調査の分析から」第 59 回日本老年社会科学会大会，2017 年．

④Yumika Shirase, Nobuyuki Izumida, “The most important aspect of everyday life among the older people in Japan: comparison among the volunteers, participants, and non-participants of a preventive long-term care program”, Gerontological Society of America, 69th Annual Scientific Meeting, 2016.

⑤ Yumika Shirase, Nobuyuki Izumida, “Gender differences in roles within a family among older Japanese people”, 4th International Conference on Global Aging, Tsukuba Global Science Week, 2016.

⑥白瀬由美香・泉田信行「高齢期のソーシャルサポートの欠如と関連する要因：ふれあいサロン参加者・非参加者の比較分析」第 58 回日本老年社会科学会大会，2016 年.

⑦ Yumika Shirase, Nobuyuki Izumida, “Going-out behavior of elderly Japanese people and related factor: comparison between participants and non-participants in a daily activity program”, International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Congress 2015, 2015.

⑧ Nobuyuki Izumida, Yumika Shirase, Mayumi Imahori, Haruko Noguchi, “Potential bias in the needs estimation by “the care needs survey” in Japan”, International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Congress 2015, 2015.

⑨白瀬由美香・大塚理加・泉田信行「高齢者ふれあいサロンへの参加と外出行動：サロン参加者・非参加者の比較」第 63 回日本社会福祉学会秋季大会，2015 年.

⑩泉田信行・白瀬由美香・今堀まゆみ・野口晴子「地域在住高齢者の健康・幸福感と家族介護との関連：主観的健康感・主観的幸福感の関連を踏まえた分析」第 57 回日本老年社会科学会大会，2015 年.

〔その他〕
中野智紀・朝比奈ミカ・日置真世・猪飼周平「座談会 生活モデルで支援を紡ぐ」『訪問看護と介護』(医学書院) 23(2):77-87, 2018 年.

６．研究組織
(1)研究代表者
白瀬　由美香（SHIRASE, Yumika）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：５０４５４４９２

(2)研究分担者
泉田　信行（IZUMIDA, Nobuyuki）
国立社会保障・人口問題研究所・社会保障応用分析研究部・部長
研究者番号：７０３６０７１６

猪飼　周平（IKAI, Shuhei）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：９０３４３３３４

(3)研究協力者
赤木　佳寿子（AKAGI, Kazuko）
一橋大学・大学院社会学研究科・科学研究費研究員